

基本を覚えて使いわけよう「ウキを知りたい！」

- 橋本市主催 へら鮎釣り大学 -

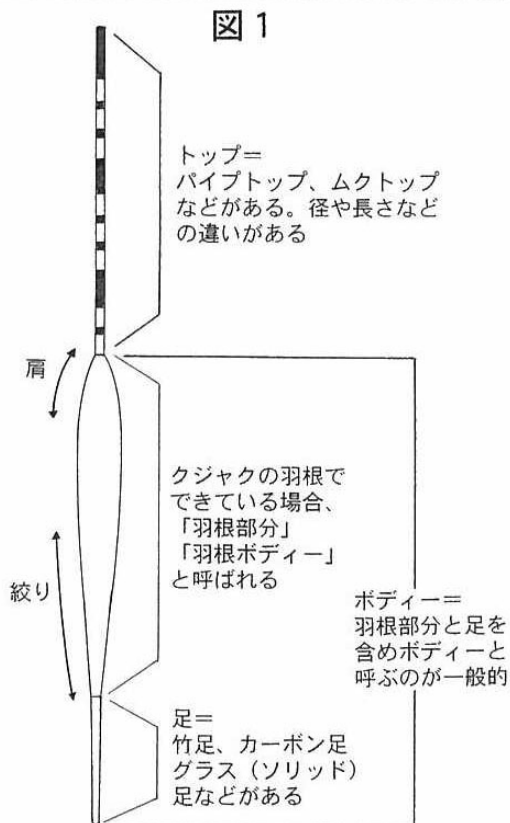
はじめに

「へら専科」2005年3月号～2006年2月号まで、「基本を覚えて使いわけよう『ウキを知りたい!』」というタイトルで、へらウキ製作者側から見た、へらウキの各パーツの分析、水の抵抗、へらウキの使い分け等、へらウキに関する様々なことについて、考察してきた。

ここでは、次回の連載に向けたアイデア等を盛り込みながら、ウキ作者がどんな考え方に基づいてウキを製作しているか、その一旦を知っていただければ、幸いである。

へらウキの各部パーツの名称について

へらウキは大別して、3つのパーツからなる。



(出典：「へら専科」2005年3月号より)

具体的には、ボディ、トップ、足である。ボディと足をあわせて、ボディと呼ぶこともある。例えば、2004年までのG杯九州地区予選では、ウキはボディ13cm以上という規程になっていたが、このときのボディとは、ボディと足を足した長さが13cm以上ということである。

ボディの素材とその変遷

ヘラウキのボディは、現在、孔雀の羽根とカヤが主流である。過去で言えば、桐、バルサ、発砲スチロール、珍しいもので、ゴーチョ（ヤマアラシの毛）などがあったが、現在は、カンザシウキやナイターウキで、バルサ材や発砲スチロールを使った物が見られる以外は、ほとんど姿を消してしまった。

孔雀の羽根とカヤを比較してみると、

(1) 孔雀の羽根

長所は、

カミソリも欠けるほどの硬い表皮による耐久性、 白い羽根の美しさ

短所は、

加工が難しい、硬く、真円ではない。 近年では鳥獣保護や鳥インフルエンザによる輸入量減少に伴う良材不足、 天然素材ゆえの選別によるコスト高 がある。

(2) カヤ

長所は、

加工がやさしい、柔らかく、真円に近い。 素材が入手しやすい、 コスト安、また、羽根に比べて選別する必要が少ない。

短所は、

孔雀の羽根に比べると耐久性が劣る、 浮力が孔雀の羽根に比べると弱い、 素材そのものは白くない。といった点がある。最近では、多くのトップトナーメンターの方々が、自分のイメージ通りのウキを追い求め、カヤウキを自作されている。

トップについて

トップは大別して、パイプとムクの2つのカテゴリーに分類される。

パイプは、トップの中に空気が入っている。ムクは素材のみで、中に空気は入っていない。

パイプの太さには、細い順で、極細 細 中細 太 極太の種類がある。

変わりトップとしては、逆テーパートップ、上ムク下パイプ（上部はソリッドで下部はパイプ、関西に見られる）、上パイプ下ムク（上部はパイプで下部はムク、大バラケを使った角麩の釣り用）、パイプとムクの交互（視認性に優れている）がある。

素材の違いにより、表1のように分類することができる。

(表1)

No.	大分類	No.	中分類	特徴
1	パイプ	1	セル	<p>長所は肉が薄く、軽いことから、サワリも的確に表現する。</p> <p>短所は、熱に弱く、保管に気をつけないとトップがすぐに曲がってしまう。また、最近では素材が入手しにくくなっている。</p>
		2	パール	<p>肉厚は、セルと後述のポリカーボとの中間である。</p> <p>長所は、素材そのものが名前のとおりパールのように白いので、蛍光塗料の発色がよい。</p> <p>短所は、セルほどではないが、熱に弱く、保管に注意が必要である。また、セルと同様、熱で伸ばして加工しているので、素材にバラツキがあり、選別が必要である。</p>
		3	ポリカーボネイト	<p>長所は、熱に強く、曲がりほとんどない。素材のバラツキも少なく、丈夫で折れにくい。チョーチン釣りで、竿先にトップが当たっても破損が少ない。</p> <p>短所は、肉厚が、上述のセル、パールの中で一番厚いが、最近では、肉薄の改良されたものも出てきている。表面がツルツルで塗料の食い付きが悪いため、トップの塗装の前に表面を荒らす必要がある。素材そのものは、白くないため、トップの塗装前に下地塗装が必要である。</p>
2	ムク	1	ガラスソリッド	<p>長所は、素材自体が硬くはりがあるので、ロングトップに使用しても、水切れがよい。また、加工しやすく、一般的な釣具店で購入が可能である。</p> <p>短所は、比重が素材の中で一番重いため、その特性生かすような使用が必要。</p>
		2	ポリカーボネイト (PCムク)	<p>ガラスソリッドより、比重が軽く、パイプとガラスソリッドの中間のような特性を持つ。また、比重が軽いので、ガラスソリッドよりも太いものが使用でき、視認性が向上できる。</p> <p>短所は、素材自体が柔らかいため、ロングトップに使用すると水切れが悪いこと、素材自体が柔らかいため、カッターでの加工は難しく、回転させて紙ヤスリで削りだす必要がある。</p>

足について

ヘラウキの足の素材も、トップと同様、様々な種類があり、それぞれ以下のように分類することができる。以前は、オールピーコックと呼ばれるものもあったが、最近では姿を消してきたため、割愛した。

No.	分類	特徴
1	竹	竹は竿の素材としても使用され、見た目では足の素材として、一番マッチングする。また、比重が軽く水に浮くことから、ウキ全体の浮力（復元力）を増加させることができる。 短所は、カーボンやソリッドと比較して強度が低い。このため、細く削りだせない、また、素材自体に曲がりがある。このため、底釣り用のあまり長さが必要でないタイプによく使用される。
2	カーボン	比重は重く水に沈む。また、強度があるため、細く長い足が製作可能である。こういった性質を生かして、浅ダナ用足長ウキの足素材として、多用されている。また、硬度が高い（硬い）ため、ウキが立った後、安定する。 短所は、加工が難しいこと、特に硬度が高いことから、羽根とカーボンの接合部分にクラック（ひび）が発生しやすい。
3	グラスソリッド	比重は重く水に沈む。また、強度があるため、細く長い足が製作可能である。ただ、カーボンよりも硬度が低い（柔らかい）ため、ウキが立った後の安定感は、カーボンを足に使ったウキよりも、ブレが発生しやすいように感じる。しかしながら、カーボンよりも加工しやすいので、上記のようなクラックの問題はほとんど発生しない。

各部パーツの比重について

ご存知のとおり、水の比重は1で、これよりも重ければ水に沈み、軽ければ水に浮く。ヘラウキを構成する各パーツの比重を分析することにより、次回以降のウキの立ち上がり、復元力を深く理解することが可能になると考える。

比重という言葉は辞書でひくと、「ある物質の質量と、それと同体積をもつ標準物質の質量との比。通常、セ氏四度の水を標準物質とする。」とある。簡単に言えば、比重とは、水 1 立方センチメートル 1g に対する当たりの重さの数値比較である。

試験片はヘラウキの製作に使用しているものをそのまま使用しており、孔雀の羽根やカヤ、竹は天然素材であることから、バラツキがある。また、試験片の重量を測定する計量器についても、プロユースのものではないので、この結果はあくまで、目安ということで、ご理解をお願いしたい。

表の右側には、書籍や Web サイトで調べた数値を参考として、掲載している。

No.	分類	比重	参考(書籍やWebサイトで調べた数値)
1	クジャクの羽根	0.17	-
2	カヤ	0.23	-
3	竹(編み棒の0番)	1.01	0.69
4	PCMク	1.27	1.20
5	カーボン	1.40	1.80
6	グラスソリッド	1.91	2.50

結論：比重の軽い順：孔雀の羽根→カヤ→竹→ポリカーボネイト→カーボン→グラスソリッド
 確かに、試験片を風呂場で沈めてみると、孔雀の羽根とカヤは浮くが、それ以外は上記の順番でゆっくりと沈んでいき、グラスソリッドが沈むのが一番早い。

* 竹の数値に一般に公表されている数字と大きなヒラキがあるのは、編み棒は比較的、竹の表皮に近い硬い部分を使用しているためと思われる。

トップの素材の違いがヘラウキに与える影響について

釣り人の同士の会話で、よく、「このウキはパイプトップだから、よくエサの荷を背負う。」というようなことをよく耳にする。では、トップの素材の違いが、ヘラウキにどのような影響を与えるのであろうか。

ウキのなじみ幅の違い比較

ボディの仕様がまったく同じウキにトップの素材のみが異なるウキを浮かべ、ウキのなじみ幅の違いを調べてみる。

ヘラウキの仕様

トップの素材を除く仕様は全て同じ。



ボディ：孔雀の羽根、塗装前で5.8mm径、100mm

トップ：グラスムクムク1.4mm(テーパーなし)、パールトップ1.4mm(テーパーなし)

足：竹製、塗装前の状態で、2.0 mm 1.2 mmにテーパづけ

参考：オモリ荷重 パールトップ：1.69 g、 グラスソリッド：1.28 g

参考：ウキ下からオモリまで、約20 cm 浴槽にて実験

上記のウキにそれぞれ、下記のエサにみたてた消しゴムをぶらさげてみる。

左側：グラスソリッドトップ、右側：パールトップ

(エサ落ち)



上記各2枚の写真から、同容積の、はほぼ同じナジミ幅を示す。つまり、トップの素材、グラスソリッドかパールか、パイプかムクといった素材に関係なく、同一容積であれば、同じナジミ幅を示すことがご理解できると思う。

これは、「ウキへの荷重に対する変化量は、水面上に出たトップの容積によって決まり、水中のボディ形態、浮力、材質とは無関係である。」という「アルキメデスの浮力の原理」に合致する。

トップの復元力

ウキをトップ先端まで、水中に押し込み、はなしてみる。

グラスソリッドのウキは、水中に押し込むとゆっくりと戻ってくるが、パールトップのウキはグラスソリッドのウキよりもかなり早く戻ってくるのがわかる。

この戻る速度、およびなじむ速度の違い、つまりトップの素材の差は、「復元力の違い」だと考えている。

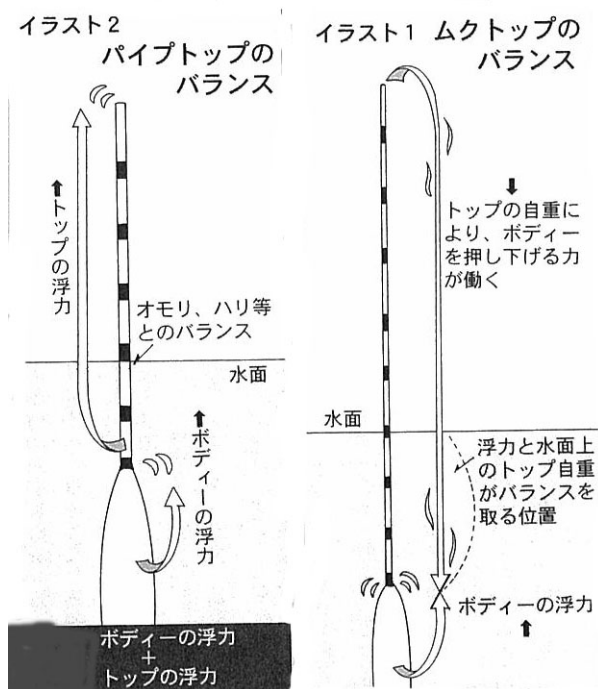
具体的には、グラスソリッドは「各部パーツの比重について」でみたとおり、比重が1.8で水よりも重い場合、ボディの浮力に依存して、水中のオモリ+針の重さとバランスしている。

従って、わずかの力(アタリやサワリ)で動くが、復元力が弱い場合、モゾーとしか表現しない。

これに対し、パールトップ(パイプ)は、中に空気が入っており、水よりも軽い場合、ボディの浮力

+トップの浮力で、水中のオモリ+針の重さとバランスしている。

従って、わずかの力(アタリやサワリ)では、その復元力により、吸収されてしまう可能性があるが、その復元力ゆえに、シャープにツンとしたアタリを表現してくれる。



(出典:「へら専科」2005年5月号より)

トップの容積

上記の実験から、「ウキへの荷重に対する変化量は、水面上のトップの容積によって決まり、水中のボディ形態、浮力、材質とは無関係である。」という「アルキメデスの浮力の原理」にヘラウキがあてはまることがわかった。

それでは、トップの径が異なる場合には、何が影響するのであろうか。

トップの径は概して、パイプトップは太く、ムクトップは細いということが言える。

円柱の容積は、「 r (半径) $\times r$ (半径) $\times 3.14$ (円周率) \times 高さ」で求めることができる。

【細パイプトップ】

$$1.2\text{mm} \times 1.2\text{mm} \times 3.14 \times 100\text{mm} = 452.16$$

【ムクトップ】

$$0.8\text{mm} \times 0.8\text{mm} \times 3.14 \times 100\text{mm} = 200.96$$

*ただし、テーパがないと過程する。

上記の算式より、パイプトップはムクトップの2倍以上の容積を有することがわかる。

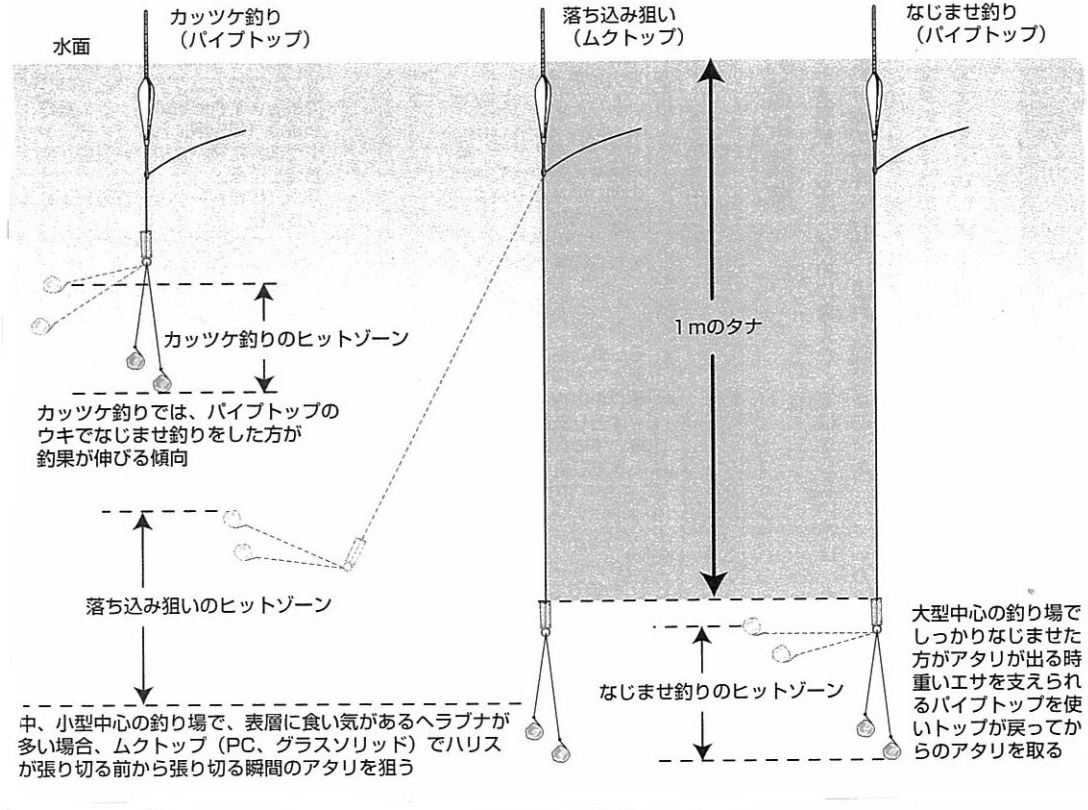
普通パイプトップのウキは、トップの長さが、ボディ+足の合計より短いのに対して、ムクトップのウキは、トップ長さが、ボディ+足の合計より長いのが通例である。

これは、「アルキメデスの浮力の原理」である容積の差がオモリ負荷量の差であることから、ムクトップのウキは、トップを長くすることにより、この差を補っているとも考えられる。

ムクトップは、PCムク、グラスソリッドとも比重は水よりも重いため、なじむ速度は速くなる。
 しかしながら、長さが長い、つまりトップのストロークが長いことから、釣り人の側には、ゆっくりなじんでいるような錯覚があるのではないだろうか。

ムクトップのウキとパイプトップのウキの使い分けについて

図-1 タナ・ヒットゾーンによるウキの使い分け

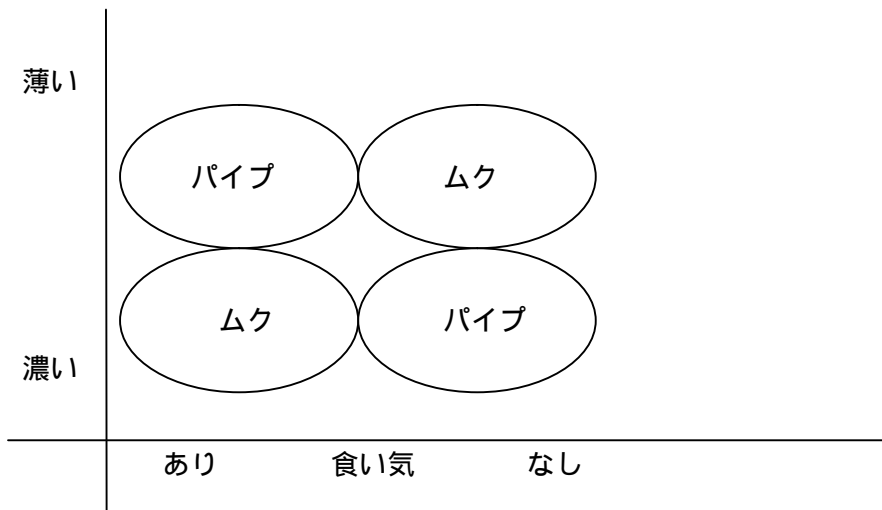


(出典：「へら専科」2004年12月号「ステップアップ講座」より)

- パイプトップ：オモリより下にヘラブナを寄せ、**タナを凝縮**して釣る場合
- ムクトップ：オモリより上にいるヘラブナに**エサを追わせて**釣る場合
- ：ムクトップの性質を利用してエサを入れて釣る場合

*底釣りの場合は、ヘド口が溜まっていない底の状態が良い場合のみ、底の状態が悪い場合には、ムクトップでは戻りが悪くなることから、パイプトップのほうが釣りやすい。

魚影



ウキの入り

夏場、魚が湧いてしまい、ウキが入っていかないことは、多くの方が経験していると思う。

このような場合、トップにガラスソリッド製のムクトップを使ったものを使うとスムーズになじみ込ませることができる。これは、まさにトップの比重を利用したものである。

お風呂で、洗面器を逆さにして、空気が入ったまま沈めようとする、沈めるのにかなりの力が必要となる。しかし、底が抜けている洗面器であれば、簡単に沈めることができる。

つまり、空気が入った洗面器はパイプトップで、底が抜けている洗面器はムクトップに例えることができる。

こういった一手も、トップの素材の特性を理解すれば、応用できるのではないだろうか。

エサ使いの幅の広がり

ムクトップウキの使い方は、パイプトップウキのように、「なじんで戻してツン」というアタリを狙うのではなく、なじんでいく途中のアタリを取るのが主流である。

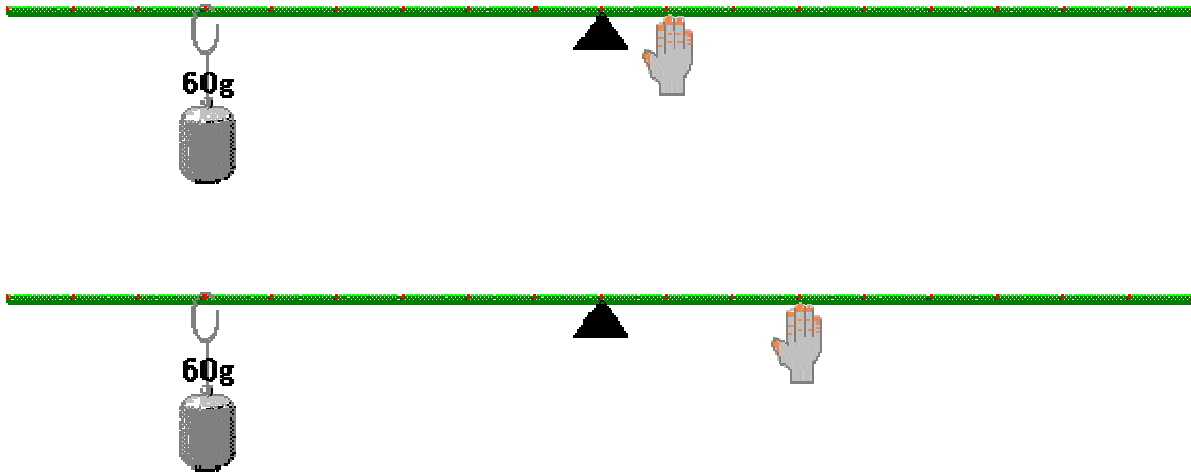
これは、ハリスのストロークに加えて、長めのトップのストロークにより、動いているエサにしか興味を示さないヘラブナに、エサを追わせながら食わせるというイメージである。

また、パイプトップではなじみがでないような軽いエサでも、トップの自重により、エサをなじませることができる、エサ使いの幅を拡げることができる。

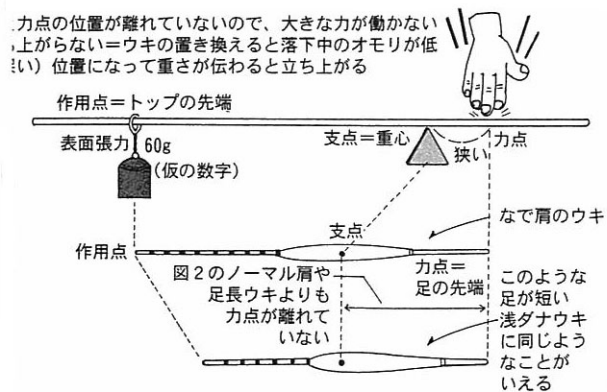
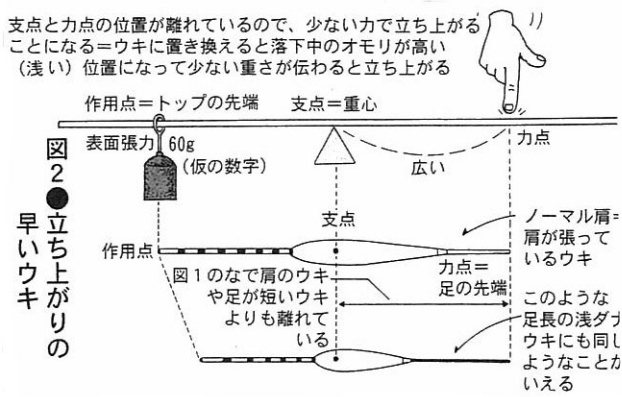
盛期におけるムクトップ使用と同様、こういった一手も、ヘラウキに使われている素材の特性を理解すれば、応用できるのではないだろうか。

ウキのバランス(足の長さ)について

ウキの立ち上がりについては、ボディとトップの付け根で立つことが理想と言われている。
 ボディが長く、トップが短いとボディを出して立ち上がり、逆にボディが短くトップが極端に長いと
 トップの途中で立ち上がり、一旦戻るような動きをして馴染み始める。
 このように、ボディ、トップ、足のバランスをとることが重要である。



授業に役立つページ（理科）、児童、生徒に役立つページ、てこ
 （京都府立南丹高校勤務、浅尾先生作の Web サイトより）



(出典:「へら専科」2005年11月号より)

ウキのボディ形状について

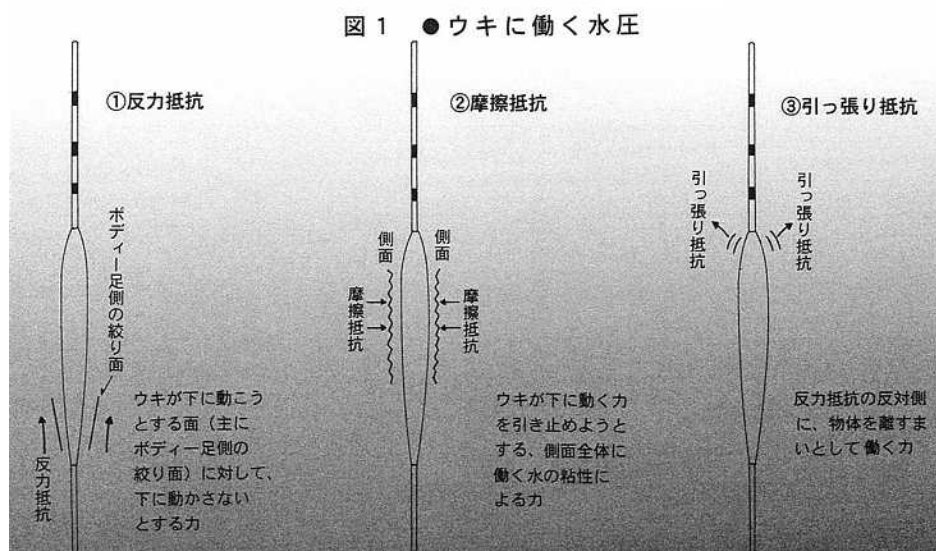
過去には、トンカチウキや逆流線型のウキもあったが、現在では下記の3種類が主流である。

流線型(肩張りタイプ): 重心が上にくることにより、ウキの立ち上がりが早くなるため、浅ダナのウキに多用される。

流線型(なで肩タイプ): 重心が下にくるため、ウキの立ち上がりは遅くなるが、底釣りでなじむ途中に余計なサワリがでないため、多用される。また、水の抵抗が少ないため、僅かな動きを表現する。

ツチノコ型: ボディの上下を絞ったタイプ。加工部分が少ないため、素材の持ち味を活かすことができる。また、水の抵抗が少ないため、上下に大きな動きを表現する。

ヘラウキに働く水圧について



(出典:「へら専科」2005年8月号より)

ヘラウキがあるショックによって動こうとすると、ヘラウキに対して働いている水圧が、以下の3つの異なった抵抗に変化して、ヘラウキに作用する。

反力抵抗 = ヘラウキが下動しようとする面(主にボディ足側の絞り面)に対して、下動させまいとして働く反力抵抗

摩擦抵抗 = ヘラウキの下動を引きとめようとして、側面全体に働く水の粘性による摩擦抵抗

引張抵抗 = 反力抵抗の反対側に物体を離すまいとして働く引張抵抗

引張抵抗は、船が進むとき、船の後ろに生じる渦などがそれで、形状によっては、かなりのブレーキになる。ヘラウキでは、一昔前にカツケ釣りでも多用されたトンカチウキ(頭側の絞りが無いヘラウキ)がこれにあたる。

ウキの使い分けについて

最近のヘラウキの傾向は、用途が細分化されていることである。

特に浅ダナ釣りのウキは、ウキの性能が釣果に大きく影響することから、様々なスタイルのものが市販されている。その多くは、機能そのものを極限まで絞り込み、特定の状況下でのみ、その機能を最大限発揮できる作りとなっている。そのため、その用途にあった使い方をしないと、ウキ自体のもつ性能を引き出すことができず、釣果も伸びない。

また、「ダンゴの底釣り」というエサにみられるように、コンセプトは底釣り用として開発されながら、浅ダナ釣りに多用されるというように、ヘラブナ釣りでは、意外な使われ方が、好釣果につながることもある。この意外性が、ベテランも含めた多くのヘラ師の心を惑わし、かつ、楽しませる要因ではないかとも思う。

ウキの役割は、ヘラのアタリをキャッチする以外に、エサをポイントまで運ぶ、エサをタナまで運ぶという役割がある。

また、釣果はヘラの密度、エサの沈下速度により、大きく左右される。

特に沈下速度については、ウキ、ハリスの長さ、ハリの重さ、エサの比重の組み合わせによって変化をつけることができるが、ウキの選択が沈下速度に最も大きく影響する。実釣においてヘラ師は、ウキを基準にして、ハリスの長さ、ハリの重さ、エサの比重を組み合わせることにより、理想的な状態を探っていると言えよう。

逆に言えばウキの選択は、どのタナで、どのような状態のエサを、どのように(追わせながら、タナを凝縮しながら)釣るのかをイメージすることが重要であると考ええる。

釣るタナに応じたウキの使い分けについて

釣るタナに応じたウキの使い分けについて、以下のとおり整理することができる。

- (1) 表層～カッツケ：ハリスカッツケから、1m未満のタナを釣る場合に使用する。
- (2) 1m：1m以上～2m未満のタナを釣る場合に使用する。
- (3) チョーチン：竿の長さ＝タナとなる。
- (4) 底：ハリを底に着けた状態で釣る場合に使用する。

大別すると上記4パターンに区分できるが、両グルテンやペレ宙といった釣りも上記に4区分に含めることもできるが、ウキがその釣り方のキモになる部分もあるので、別途章立てして紹介したい。

以下は、 タナ、 釣り方、 ヘラの活性と密度、 から割り出した、 尽心作の各タイプの考え方である。(2007年12月1日現在)

タナ	釣り方	Type	考え方
1 m未満	カッツケ	Type E	ハリスカッツケと呼ばれるものから、 1 m未満のタナを釣る場合に使用する。全長で150 mm以下が目安となり、ボディは30 mm~40 mmとなる。小ウキでトップとボディの付け根ですばやく立ち上がることが要求されることから、足はカーボンの足長タイプにしている。グラスソリッドは、その素材の柔らかさから、ハリスとからまることが多いので、このタイプには採用していない。なじませて釣り込むイメージであることから、パイプトップを採用している。
カッツケ	カッツケ	Type E2	Type E との違いは、トップの材質にある。ヘラがはしゃいで、ウキが入らない場合には、ムクトップを使用し、トップの比重を利用してウキを入れる。さらに細分化すると、PCムクとグラスムクのトップのウキに分かれる。グラスムクはPCムクよりも比重が重いので、よりウキが入り易くなる。
1 m	両ダンゴでなじませ気味での釣り	Type D	ハリスが張り切った直後、またその直前で食わせるような釣り方に使用する。ボディは盛期で使うことが多いので、2枚合わせでややオモリを背負うタイプにしている。ヘラ鮎の活性と密度にあわせて、トップの長さを決定し、そのバランスで足の長さを決めている。先月号で述べたように、ウキの地域性ということで、九州を拠点とする私の場合は、トップはやや長めとなり、そのバランスで足も長くなっている。足の素材はカーボンまたは、グラスソリッドで、ウキの安定性を確保する点からも、足長タイプにしている。なじませて釣り込むイメージであることから、パイプトップを採用している。
1 m	両ダンゴで追わせる釣り	Type D2	Type D との違いは、トップの材質にある。1 mより上にいるヘラを引きずり込んで、なじみ切る前に食わせるような釣り方に使用する。ムクトップを使用し、トップのストロークを有効に使用する。PCムクとグラスムクのトップに分かれるが、

			Type E2 と同様、ヘラの活性と密度により使い分けが必要である。
1 m	厳寒期のウドンセット釣り用	Type D3	ウドンのセット釣り専用で、食い渋り時に使用することが多いため、孔雀の羽根 1 本取りの 5 mm 径のものとし、水の抵抗を受けにくいタイプにしている。足はカーボンまたは、グラスソリッドの足長タイプにしている。バラケにペレットや粒ペレットといった比重の大きいダンゴを使用することが多いため、トップは Type-D よりも 1 ランク太い中細サイズを使用している。タナを凝縮するために、長いトップは必要ないと考えている。
2 m 前後	ペレ宙	Type B	長竿で沖目にいる大型ベラをターゲットにしている。大型と中小型の層をわけるために、ボディは 6 . 0 mm 径以上で、オモリを背負うタイプにしている。エサに比重のあるペレットを使用するため、トップは太めにしている。従って、太いトップは表面張力の影響を大きく受けることから、これを緩和するために、足はカーボンまたは、グラスソリッドの足長タイプにしている。
チョーチン	両ダンゴでなじませる釣り	Type C	チョーチンのタナで、ハリスが張り切った直後、またその直前で食わせるような、タナを凝縮した釣り方に使用する。ボディは盛期で使用することが多いため、2 枚合わせでややオモリを背負うタイプにしている。足の素材は、ウキを早く立たせたい場合にはカーボン、立ち上がりをソフトにしたい場合には竹製としている。トップはダンゴが 2 コ支えられる太さが必要であるため、Type D よりもやや長めとなっている。
チョーチン	両ダンゴで追わせる釣り	Type C2	Type C との違いは、トップの材質にある。ヘラがはしゃいで、ウキが入らない場合には、ムクトップを使用し、トップの比重を利用してウキを入れる。さらに細分化すると、P C ムクとグラスムクのトップのウキに分かれる。グラスムクは P C ムクよりも比重が重いので、よりウキが入り易くなる。
底釣り	なじませる釣り	Type A	典型的なウキがなじんで、戻してツンのアタリをとる釣りに使用する。ボディはうわずらないよう、一気に底までなじませますので、2 枚合わせ

			でオモリを背負うタイプにしている。なじみ込み途中の余計なサワリをださないために、短い竹足タイプ、ウキの肩もなで肩にしている。トップは戻りを重視するため、極細、もしくは細のパイプトップにしている。タナを凝縮するために、あまり長いトップは必要ない。
底釣り	段差の底釣り	Type A2	段差の底釣りも様々なスタイルがあるが、深宙釣りの延長的に考えている。ボディはうわずらないよう、一気に底までなじませるので、2枚合わせでオモリを背負うタイプにしている。底釣りタイプよりも、やや立ち上がりを重視した竹製の足長タイプにしている。トップはクワセの重さを表現できるように、極細パイプ、もしくはPCムクにしている。
底釣り	ウドンの底釣り	Type H	両ウドンの底釣りに使用する。ボディは、微細な動きも表現できるように、1本取り4.5mm径で、水の抵抗を受けにくい、ツチノコタイプにしている。足は底釣りタイプよりも、やや立ち上がりを重視したカーボン製の足長タイプにしている。トップは微細な動きを表現できるように、グラスソリッド0.8mmもしくは0.6mmを削り出している。

ウキの使い分け

以下の解説は、あくまで釣れない時の一手とお考えいただきたい。釣れない時には、ヘラの口に近いほうから、手をつけていくのが常道である。具体的には、エサ、ハリスの長さ、ハリのおおきさである。

エサにも基準が必要なように、ウキにも基準が必要である。「尽心作 匠」の場合、1 mの浅ダナは、Type-Dを基準にしている。

トップを中細タイプ (Type - D3) に変更 (バラケの投入量を増やす)



魚影が薄い



ウキのサイズダウン

標準 (Type - D)

ウキのサイズアップ



魚影が濃い



トップをPCMクトップタイプ (Type - D2) に変更



トップをグラスムクトップタイプに変更

ウキの交換を容易にする方法について

トーナメントの方のウキケースを見ると、下記画像のように、ウキの足に板オモリを巻いてあるのを見ることができる。

また、マルキューから発売されている「タングステンオモリ」は、0.5 g、0.75 g、1.0 g のオモリ交換が簡単・迅速にできる。



これを組み合わせることで、ウキの交換を容易にすることができる。

私の製作する「尽心作 匠」では、ウキのオモリ負荷量を表示している。これを目安にすると、魚が

はしゃいでウキが入らない場合でも、オモリ負荷量の大きいウキに容易に交換することができる。

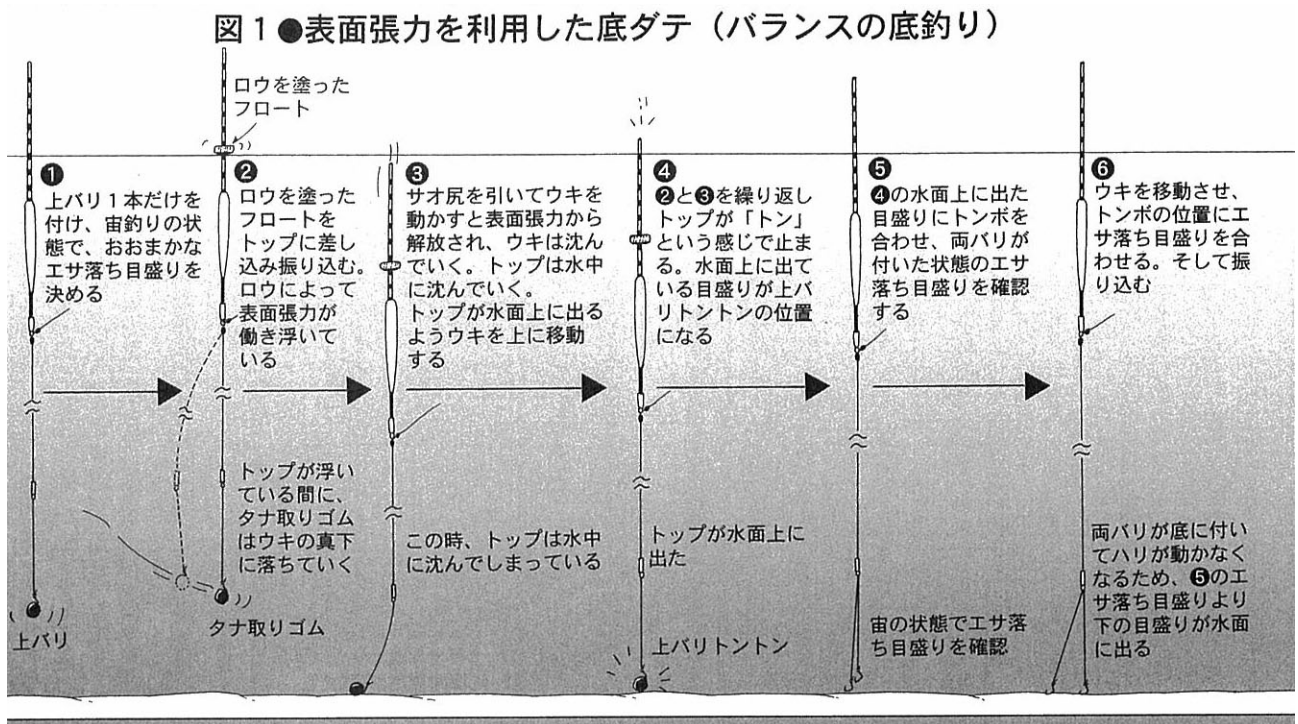
表面張力を利用した水深の測り方について

宙釣りでは、エサがなくなると特殊な場合を除いて、エサ落ち目盛ができる。しかしながら、底釣りでは、エサ落ち目盛以上の目盛がでていてもエサが持っていることもある。逆に、なじみ幅がでていても、エサが持っていない場合もある。

この辺りのウキの動きが、底釣りを難解なものにしているのではないだろうか。

基準を持つことは大切なことである。基準となるエサ、基準のエサ落ち目盛等、基準を持つことによって、刻々と変化する状況に適切な次の一手を打つことができる。

特に底釣りにおいては、水深測定、俗に言う「底立て」が基準のひとつになることは言うまでもない。前回の解説とダブル部分もあると思うが、図示しながら、改めてその手順を解説したい。



（出典：「へら専科」2005年12月号より）

上針1本のみで、大まかなエサ落ち目盛を決め、針に粘土オモリをつける。

蠟をこすりつけたフロートをウキのトップに取り付け、通常どおりに振り込む。蠟を塗ったフロートは、沈んでしまう程のタナトリゴムを有しながらも、表面張力により浮いている。この浮いている間に、ミチイトが真っ直ぐに張る。

竿尻を引いて、表面張力を開放するとウキは沈んでいく。

その作業を何度か繰り返すと、粘土製のタナトリゴムが底について、「トン」といった感じでトップが止まる。止まった位置が上バリトントンの位置となる。

この位置にトンボを装着、さらに下バリを装着し、ウキ下を浅くして、正確なエサ落ち目盛を設定する。

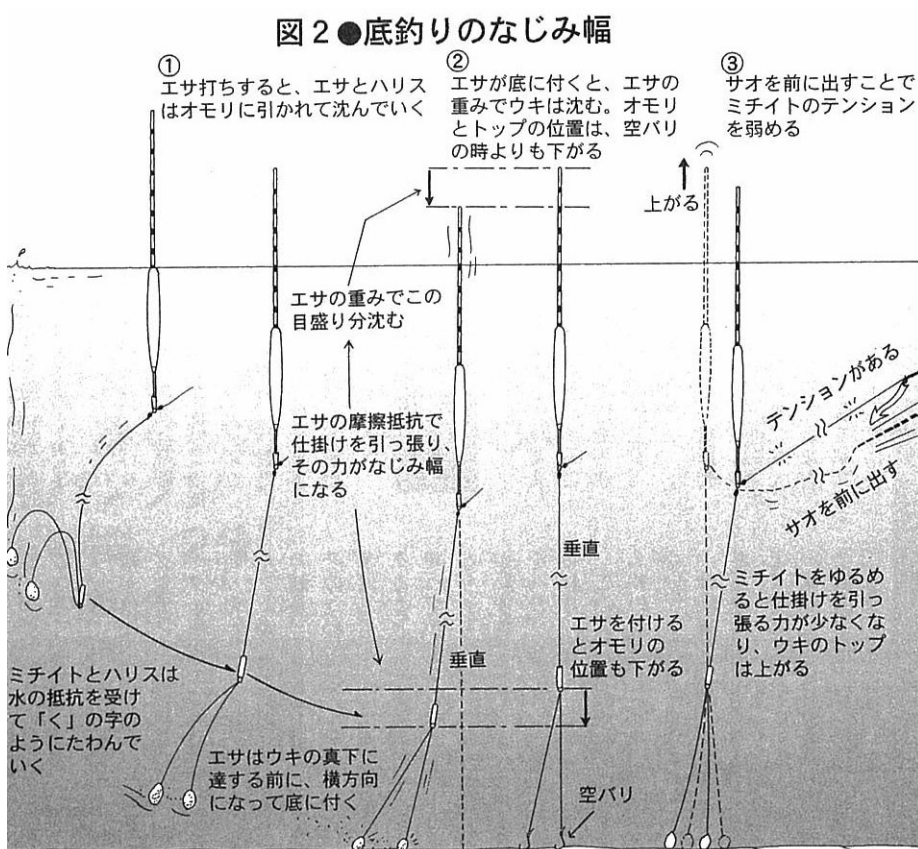
トンボの位置にウキのエサ落ち目盛をあわせると、上バリトントンの位置となる。この状態で振り込むと、ハリの重さが消えるため、エサ落ち目盛よりも、わずかに下の目盛がでる。

底釣りのナジミ幅について

底釣りでは、両方のエサが着底しているのにもかかわらず、なぜナジミ幅がでるのだろうか。ダンゴエサとグルテンエサでは、同じタナでもなぜナジミ幅が異なるのだろうか。また、竿を送ってやる（前につきだしてやる）と、なぜウキは上がってくるのであろうか。

以下、これらの疑問について、解説していきたいと思う。

図2 ●底釣りのなじみ幅



(出典：「へら専科」2005年12月号より)

振り込み後、ウキが立ち上がり、なじんでいく。この時、エサとハリスはオモリに引かれて沈んでいく。ウキは、エサ、ハリス、オモリに同調しながら、徐々になじんでいく。

水中ビデオで見ると、道糸は水の抵抗力を受けて「く」の字のようにたわみながら、沈んでいく。特に振り切って打った場合は、顕著にこの現象をみることができる。

次にハリスを伴って、エサが沈下していく。ここでもハリスは、弾性や塑性が関係して、「く」の字のようにたわみながら、沈んでいく。

エサの重みに伴って、オモリも沈下する。つまり、オモリの位置が、空バリの時よりも下がる。この場合、オモリの位置が下がらなければ、エサの沈下はウキの真下まで続くのだが、オモリの位置が下がることにより、エサはウキの真下に達する前に水底に着底してしまう。従って、エサ

の着底点はウキの真下から少し横方向にズレたことになる。すると、エサは船のイカリのように、横にズレた分だけ、仕掛け全体を引っ張る。この力が、エサのナジミ幅になって現れる。このナジミ幅は、宙釣りにおけるエサの重さではなく、あくまで仕掛け全体を引っ張る力である。従って、比重の重いエサほど、引っ張る力が強くなり、ナジミ幅が多くなる。同じタナでも、両グルテンのときは、ナジミ幅が少なく、両ダンゴにするとナジミ幅が多くなるのは、エサの比重の違いにより、仕掛けを引っ張る力が違うからである。また、竿を送ってやる（前につきだしてやる）と、仕掛けを引っ張る力が弱まるため、ウキが上がってくる。

以下は、あくまで私見であるが、底の状態がよく、正確にタナが取れている場合には、以下の現象を見ることが出来る。

エサ落ち目盛り、もしくはエサ落ち目盛りを通過してすぐの目盛りでほんの一瞬、ウキが止まる。その後、またゆっくりとなじんでいく。

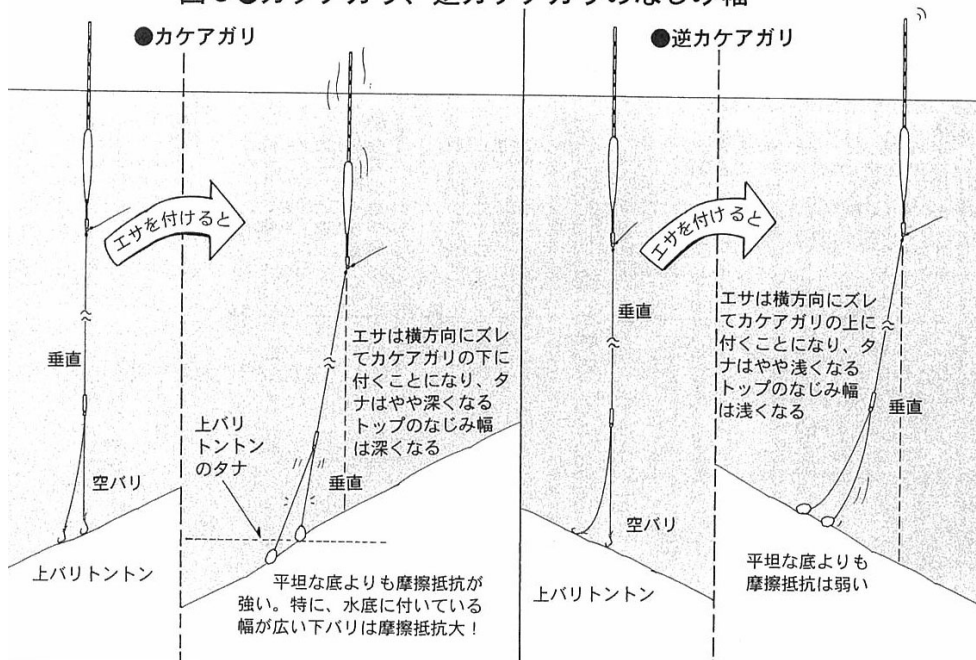
これは、底の状態がよい場合、エサが着底した瞬間をウキが表現しているのではないかと考えている。その後のなじみは、エサがイカリのように作用して、仕掛けを引っ張っているのではないかと感じている。

* 上記状態は、あくまで、ヘラブナがはしゃいでいない場合であり、また、尽心作を使用して感じることである。ヘラブナの状態、他作者様のウキを使用した場合には、異なる場合もある。

かけ上がりおよび逆かけ上がりでの底釣りのナジミ幅について

それでは、かけ上がりおよび逆かけ上がりでの底釣りでは、どうなるのであろうか。ベテランの方であれば、既に十分ご経験のこととは思いますが、かけ上がりの場合には通常のフラットな底の状態よりも、ナジミ幅が多くでる。逆に逆かけ上がりの場合には、ナジミ幅が少なくなる。

図3 ●カケアガリ、逆カケアガリなじみ幅



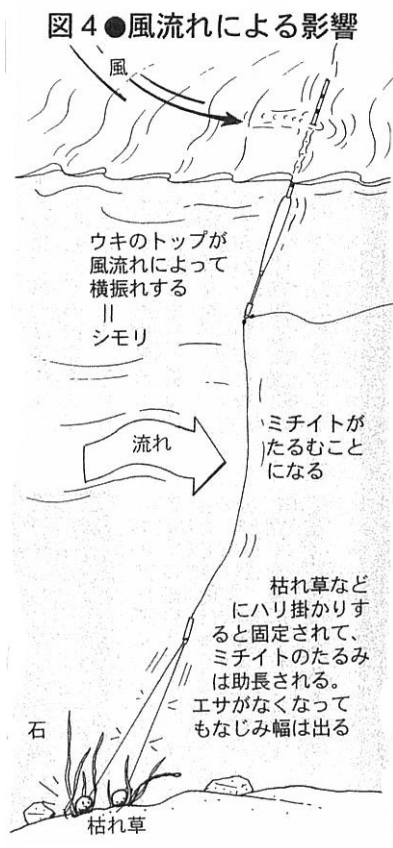
(出典:「へら専科」2005年12月号より)

上記の「底釣りにけるナジミ幅」で解説したように、エサの重みに伴って、オモリは沈下する。つまり、オモリの位置が、空バリの時よりも下がる。この場合、オモリの位置が下がらなければ、エサの沈下はウキの真下まで続くのだが、オモリの位置が下がることにより、エサはウキの真下に達する前に水底に着底してしまう。従って、エサの着底点はウキの真下から少し横方向にズレたことになる。

しかしながら、かけ上がりの場合には、上バリトントンでタナを設定したとしても、上記のように横方向にズレてしまうため、上バリトントンのタナを設定したとしても、底を切ってしまうタナ設定になってしまうこともある。それ故に、フラットの底よりもナジミ幅が出てしまうことになる。この場合には、ウキ下を上げる（深くする。）か、竿を送ってやる（前につきだしてやる）必要がある。

逆かけ上がりの場合には、上バリトントンでタナを設定したとしても、上記のように横方向にズレてしまうため、上バリトントンのタナ設定が逆にズラしてしまうタナ設定になってしまう。それ故に、仕掛けを引っ張る力が弱まり、フラットの底よりもナジミ幅が少なくなってしまうことになる。この場合には、ウキ下を下げる（浅くする。）か、竿を引いてやる必要がある。

底釣りにおけるシモリについて



(出典：「へら専科」2005年12月号より)

釣り場は一見水が静止しているように見えても、必ず流れがある。釣堀や管理釣り場ではエアレーション、野釣り場では風がつきものである。

この水の動きが仕掛け、特にミチイトに影響して、糸フケを生じさせる。底釣りでは、ハリが底についていること、野釣り場では枯れ木や岩がハリに引っかかり糸フケを助長する。これが、なじみ幅がで

ていながら、エサが持っていない典型的な例である。

エサが持っていないながら、エサ落ち目盛もしくはエサ落ち目盛以上の目盛ができるケース

上記とは逆に、エサが持っているのにナジミ幅がでないところがある。典型的な例が両グルテンの底釣りである。

これは、グルテンエサそのものが軽いと、寄ったヘラブナのあおりによって、グルテンが底から離れてしまい、その結果、ウキはエサ落ち目盛を示す。両グルテンの釣りでは、エサ落ち目盛が出た状態から、ツンとアタリができることが往々にしてある。

同じようにバランスの底釣りにおいて、ウキがなじむ、ふわっと戻してツンとアタルというものも、エサが底から離れ、その浮遊したエサをヘラブナが食うため、上記一連の流れのアタリが出るとも考えられる。

底釣りは、宙釣りとは違い、エサの重さ = ナジミ幅とはならない。

また、今回解説したことをイメージしながらウキを見ると、今まで以上に底釣りが楽しいものとなるのではないだろうか。

そのためには自分なりの基準、つまり「正確な底立て」が必要なのは言うまでもない。

エサ落ち目盛りを決める基本的な考え方について

エサ落ち目盛りを決める基本的な考え方は、

トップの復元力をどれほど残すのか。

なじんで戻してツンのアタリをとる標準的な底釣りでは、トップの戻りが重視される。従って、トップのもつ復元力を最大限に生かすために、エサ落ち目盛りはトップ中間よりも下でエサ落ち目盛りを決めたほうが良い。

逆に宙釣りの場合には、復元力が強いとカラツンの原因になる場合もある。従って、宙釣りでは、トップ中間あたり、もしくはその上でエサ落ち目盛りを決めたほうが良い。

トップのストロークをどれくらい有効に使うのか。

なじんで戻してツンのアタリをとる底釣りでは、ウワズリを防ぐ意味でも、なじむ途中のサワリはできるだけ少ないほうがよいことになる。この意味からも、エサ落ち目盛りは、トップのストロークが少ないトップ中間よりも下でエサ落ち目盛りを決めたほうが良い。

最近の宙釣りでは、動いているエサにしか興味を示さない場合が多い。エサのなじみ幅を4目盛りとした場合、もし、トップ付け根から2目盛り沈めた位置でエサ落ち目盛りを決めると、トップのストロークは、 $4 + 2 = 6$ 目盛りとなる。

もし、トップ付け根から4目盛り沈めた位置でエサ落ち目盛りを決めると、トップのストロークは、 $4 + 4 = 8$ 目盛りとなり、トップのストロークをより有効に使うことができる。

トップのストロークは、ハリスを長くした場合と似た効果が得られるが、最大の違いは、ハリスを長くすると、ハリスが張りにくくなるので、アタリをウキに伝える点にある。読者の方も、夏場にヘラブナがエサを口に含んでいるのが目で見えながら、ミチイトやハリスが張っていないため、ウキが動かないという経験をお持ちではないだろうか。トップのストロークを有効に使うと、ハリスを長く

した場合と似た効果を得ながら、ウキにはアタリが伝わりやすくなる。

エサ落ち目盛りを決める基本的な考え方は、トップの復元力を生かすのであれば、トップの付け根近くで、トップのストロークを生かすのであれば、トップ中間もしくはその上でエサ落ち目盛りを決めたほうが良いということになる。

エサ落ち目盛りを決め方について（私見）

結論から申し上げますと、「エサ落ち目盛りは、ヘラの密度、ヘラの活性、底釣りの場合には底の状態によって、ケースバイケースで変化させるべきだ。」と考えている。

私に限って言えば、ウキを製作する際には、ここをエサ落ち目盛りにしようという考えは持ってもっていない。できるだけ軽く仕上げるということに集中している。

底釣りの場合、どんなに軽く仕上げている、底の状態が悪ければ、ウキの戻りは悪くなってしまふ。こんなとき、最初に決めたエサ落ち目盛りよりも、1目盛り余分にトップを出してやるだけで、ウキの動きが変わることがある。

同様に、両ダンゴの浅ダナ釣りで、カラツンが多発する場合、最初に決めたエサ落ち目盛りよりも、1目盛り余分にトップを沈めてやるだけで、カラツンが喰いアタリに変わることがある。

写真2のように、6mm幅トップ、7mm幅トップ、といった、塗り幅を一定にしたトップを提案したのも、エサ落ち目盛りを変更しやすくする意図からである。

その他のエサ落ち目盛りを決め方について

1) ムクトップ(PCムク、グラスソリッド)を使用する場合、ハリをつけない状態で、トップとボディの付け根でバランスをとる手法がある。

これは、ムクトップのストロークを最大限に生かす有効な一手である。また、底釣りでムクトップを使う場合、ヘラがはしゃぎ気味になった場合には、ハリを重いものに変えることによって、エサ落ち目盛りを簡単に変化させることができる。

「尽心作 匠」では、このエサ落ち目盛りの設定方法に対応しやすくするために、トップとボディの接合部を透かしにしている。

2) 浅ダナのウドンセット釣りにおいて、ウドンをつけた状態で、3目盛り出し、もしくは4目盛り出しという設定にする。トップ残り3目盛り、もしくは4目盛りでバラケエサを調整しなければならず、逆にこの範囲でバラケエサを調整するため、ヘラの変化やエサの変化が掴みやすい。

この設定において、3目盛りもしくは、4目盛り出した、俗に言う「勝負目盛り」の色を赤にするのかオレンジにするのか、これは個人の好みとなる。自作ウキの良さは、この「勝負目盛り」の色も自分の好きな色に配色できることにある。

3) カッツケ釣りにおいて、エサ落ち目盛をトップ1節出しで設定にすると、たとえヘラブナがはしゃいでウキが入っていない状況であっても、ウキを入れやすくなる。また、ウキが立った瞬間からなじみ切るまでの間、早いアタリを取ることができ釣りやすくなる。これは、宙釣りにおけるトップのストロークを利用する典型的な例である。

以上